

「地域」を基点としたデザイン体系の創出を



特注個別生産

株式会社綜設計

安藤 則男

昨年は、映画「タイタニック」が空前の観客動員をしている。物語は、現代の日本の社会でありえないであろう男女の愛と古い時代への郷愁に依っている。なんとなく世紀末的時代を感じるのは、今年が九九九並びの数字のためだけであろうか？

僕が学生運動に大学生活の大半をささげ、大学を卒業したのは昭和四十六年である。日本の企業が国際舞台で徐々に頭角を現しはじめた頃である。消費は美德と言葉が生まれ、ヤクルトの容器に代表される使い捨て文化の始まりの時であった。マスプロダクションに代表される大量生産と低コスト化はまさに日本企業の独壇場となり世界を席巻したのである。それから三十年の時が流れ、情報通信の発達にもなう地球の一局化が進む中で「大量生産」に代表される日本のマスプロシステムが、タイタニック号が沈むごとく時代の終わりを見せはじめているのである。そもそもマスプロシステムは、不特定多数のユーザーをターゲットにした「便利」で、「安くて、

「大量生産」が商品の生命線であり、いまや大量生産の仕組みに低開発国まで巻き込んで価格競争を激化し、品物の偏りと生産過剰を引き起こしはじめているのである。まさに平成不況に代表される消費不況は、大量生産システム、つまりマスプロシステムの終焉を意味していると言えるのではなからうか。

さて、本題に入ろう。主題は、地域（主として山形県）におけるデザインについて意見を言いたいのであるが、前述のような時代認識を前提としないと論を展開できないため言っているのがあって、個々の企業の優れた技術力や経営を誹謗しているのではないのであしからず。

私も、山形にリターンして十六年経った。この間、山形市に事務所を構え設計事務所を経営しながら県の技術アドバイザー（デザイン分野）として県内企業の方々やデザイン関係者、また、建築関係者とさまざまな所で仕事をしてきたが、自分の行なってきた仕事を含め「建物」や「物づくり」であまり感動や

感心する場面や機会に接していないのである。自分の生活している街や地域の仕組みや仕事やマスプロの流れに乗せられている感じなのである。生活やデザインに対するこだわりがないと言っか、言い替えれば他人の作ったシステムに乗せられ、「物づくり」量産システム」と言えるがごとくマスプロシステムの幻想に取りつかれ、本来あるべき姿を忘れてるのである。

山形県には、秀麗な山々と、緑ゆたかな森、水清き川、澄んだ空気、恵まれた豊かな自然環境と、そして自然とのふれあいの中から培われた感性豊かな地域の文化がある。しかし、最近では、深く関わってきた自然との関係も壊れ、同時に地域の文化も壊れようとしているのである。

山形にあるその工場もすばらしい機械が並んだまさにハイテク工場なのである。技術、いや機械が仕事をしてきているのである。作っている物が何なのかも分からない、こんな姿の自分たちに気付いていないのである。

Value Sight 設計

「地域」を基点としたデザイン体系の創出を



当然このような作る人と使う人との顔の見えない関係は「心」や「デザイン」また、「地域性」をさほど必要としない訳で、家庭や街にあふれたこれらの物が自然環境や景観のみならず地域の「文化」をも壊していると言えるのである。ふと振り返ると私たちの身近な地域の生活や産業のデザインが見えなくなってしまったのである。地域の文化や生活を基点にしたデザインの論理と体系がないからに外ならない。

マスプロ、マセールスと言う大企業の論

理に立ち向かう、東京や大阪の大都市に比較して地方にある山形でこそ逆の発想が自らの「特長」と「独自性」を産みだす考えとして大切なのである。「量産」に対して「特注個別生産」と言うように、個人ユーザーから直接オーダーを受けて「物」を生産する。または、加工する。作り手の顔や考えが分かり、必要なものだけが作られる関係、つまり一時代前に地域社会で行なわれていた伝統工芸や手仕事にこのFace to Faceの関係があったわけだ、このような物づくりやデザインのレジュームを再構築することがキーポイントになると思われるのである。この顔の見える関係こそ、物や商品に対する「作り手」の考えを伝えることができる関係であり、テーマとしての「地域」なのである。ヨーロッパサッカーで言う地域クラブのように市民も企業も行政もクラブの一員として「地域」を核にして一緒の方向を見ようとする考えである。

自分のスタンスを考えると、自分の会社の技術とは何なのか、それがどれほどの技術なのか、そして自分の仕事は何なのか、自分の生活は何なのか、案外にして何の特徴も持っていないことに気付くのである。これまで盲目的に行ってきた大量に「物」を作れることは、どうも自分たちの商品や技術を代表するものではないことに気付くはずである。作り手としてデザイナーとして、山形に生きることに、そして自分の町がどうなのか、突き詰めると「地域」と言う認識に回帰するのである。

これまで中央から地方へ一方的に流れてきた物と情報の流れ、この流れに対峙したしつかりした地域文化と生活基盤の創出は、普遍

的な地域文化や地域産業をまもり保存し活用することであり、地域の自然環境を保護・保全する行為なのである。意識レベルの深いところから地域を見つめ、同時に地球の環境保護や人類の未来を見つめることと言えるのである。そしてこれらの課題は、地域のデザイナーやプランナーの存在と地域の産業が有機的に組み合うことで可能となるのである。

地域と地域、個人と個人を相互に結び付けるインターネット。インターネットは、距離のハンディキャップを取り除く最良の手段であり、地域や地方でこそ必要不可欠な道具と言えるのである。

最後に、一見面倒くさい人間関係や、地域の関係は、それ事体が独自の文化であり財産である。Face to Faceのネットワークなのである。山形にいる事、生きること、伝えること、そして共有できる自然があること、「地域」が新しい価値感と成りつつある。

安藤 則男

株式会社綜設計 代表取締役。

1949年山形県朝日町生まれ。山形市青田4丁目9番29号。県技術アドバイザー。県デザインネットワーク副理事長。県商品開発技術研究会会長。株式会社綜建築研究所で剣持吟教授の指導の元に建築設計及び工法開発、デザイン開発を手がける。1983年、株式会社綜設計を設立。

【建築設計】朝日自然観ホテル及びコテージ棟、小原病院、尾花沢病院他医療施設、新庄養護学校プール棟

【コンサルタント業務】地域計画構想策定（山形県、尾花沢市）、サイン・標識計画調査策定（環境庁、山形県、尾花沢市）、住宅地景観デザインガイド、大規模建築デザインガイド（山形市）、羽黒エコロジーキャンプ場、志津野営場、調査・計画立案（山形県）。